



クズ

115 編の冒頭の言葉に、これまで詩編には見られなかった不思議な表現が現れます。

わたしたちではなく、主よ／わたしたちではなく／あなたの御名こそ、栄え輝きますように／あなたの慈しみとまことによって。(1)

神こそ 栄え輝く存在であり、栄光は主のもの、と詩人たちは賛美してきました。ここでは 栄え輝くのは わたしたちではなくと、二度繰り返し、自らを否定して、栄光を神に帰しているのです。あたかも わたしたち が神のごとき存在になっ

てはいけないと言わんばかりです。わたしたちとは誰でしょうか。115編は、後半で「アロンの家への祝福の祈り」であることが判明します。レビ族は神への奉仕に専念するよう選ばれた部族で、中でも祭司の務めはモーセの兄アロンの子らにより引き継がれました。祭司たちは神殿の中枢で、支配者として働き、特別に権力を保持し、威光が大きかったことが分かるというものです。わたしたちとは アロンの家、即ち、祭司です。詩人は自戒、自重の思いを込めながら、祭司としての祈りを捧げています。

イスラエルの民は「見えざる神」に礼拝を捧げますが、なぜ国々は言うのか／「彼らの神はどこにいる」と。(2) と言われ、神々の像を持つ他民族には不可解とされたのです。祭司は見えざる神について わたしたちの神は天にいまし／御旨のままにすべてを行われる。(3) と、信仰を吐露します。国々の偶像は金銀にすぎず／人間の手が造ったもの。口があっても話せず／目があっても見えない。／耳があっても聞こえず／鼻があってもかぐことができない。／手があってもつかめず／足があっても歩けず／喉があっても声を出せない。(4) と、偶像は物にすぎず、生きた存在ではないと力説します。

イスラエルの民の歴史こそが、神が生きて、働かれた具体的な証し、徴です。けれども、見えざる神ゆえに、民も試練の時には、不安に耐えられず、目に見える神々、偶像の力を頼るようになります。祭司はその民を神へと導く務めがあります。詩人は イスラエルよ、アロンの家よ、主を畏れる人よ と、すべての民は勿論のこと、民の要となる祭司にも、主に依り頼め。主は助け、主は盾。と、三度も繰り返して宣言しています。また、イスラエルの家、アロンの家、主を畏れる人を 御心に留め／祝福してください。と、三度も繰り返して祈り求めています。主を畏れる人を祝福し／大きな人も小さな人も祝福してください。(13) の箇所の 大きな人 とは アロンの家 のことかと、つい、思ってしまう。

14節から 主があなたたちの数を増してくださるように／あなたたちの数を、そして子らの数を。天地の造り主、主が／あなたたちを祝福してくださるように。(14) と、祭司が民に語りかける口調で、あなたたち と民に呼びかけます。そして、主を賛美するのは死者ではない／沈黙の国へ去った人々ではない。わたしたちこそ、主をたたえよう／今も、そしてとこしえに。ハレルヤ。(17) との言葉はモーセ、アロンなど先祖の威光に頼るのではなく、賛美は現役の祭司の務めだと告白しているかのようです。

『讚美歌 21』は あなたの御名こそ、栄え輝きますように の箇所から、関連讚美歌として 27「父・子・聖霊の」を挙げています。 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2010-05-28>

ジュネーブ詩編歌はオルガンと装飾的なチェロによる静かな演奏となっています。

<https://www.youtube.com/watch?v=glOqzyKY38U&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=115>